

開館した県立博物館・美術館(以下県博・美術館)に人々の関心が集まるなか、浦添市美術館では美の極・漆五百年「琉球漆器名品展」(二月十五日―三月十六日)が開かれた。

担当学芸員の岡本亜紀氏によると、この様な規模の展示会企画はこれから先そうあるものではないという。本土の徳川美術館や鹿児島県歴史資料センター、首里城公園財団、県博・美術館などから借り受けた品を含め、学芸員の力のいれ具合を示すものであった。



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

十五世紀の大交易時代から十九世紀の江戸末期に作られた琉球漆器の名品の数々である。特に興味を引かれたのは一六〇九年の薩摩の侵攻で収奪され、のちに徳川家に献上されたという「花鳥七宝繁文密陀絵沈金御供飯」、一五〇〇年王府から久米島ノロが拝領した「黒漆菊花鳥虫沈金丸外櫃」/「緑塗鳳凰雲沈金丸内櫃」や「朱漆鳳凰螺鈿分銅形盒子」など。これら十五世紀から十七世紀にかけて作られた漆器の品格と存在感に圧倒された。

一六〇九年薩摩侵攻の植民地支配以降の江戸時代は黒漆に螺鈿唐山水や花鳥風月の文様漆器が多く見られるのだが、独立した琉球王国の万国津梁交易時代に作

琉球が歩んだ歴史刻印

られた器の多くは朱塗(しゆそう)のびやかで、堂々として映った。更にその渋い風格に加えて精緻に描かれたアラビア風の文様は海のシルクロードを彷彿させる高い品格を備えたものだった。これらの朱塗沈金紋様の様式は後に薩摩の要求によって大和好みの黒漆螺鈿の作風に変化したと伝えられている。展示された品々は歴史と共に様式も変化し、琉球が歩んできた複雑な歴史が刻まれていると受けとめた。

沖縄の工芸は民芸運動の影響が大きく、その枠内で語られた経緯がある。しかし前述の王国時代の名品に触れるとき、漆芸は民芸の外にあることは明らかである。紅型をはじめ宮古上

布、他の染織も同様なことがいえるだろう。

観光立県オキナワが叫ばれる今日、高いレベルの工芸がある一方、本土の観光客一丁に心える形で、沖縄工芸が土産品として生産されている現実がある。その構図は四百年前の薩摩支配以降の工芸の変化と主体性希薄な現在の沖縄社会像と微妙に重なっている。

「琉球漆器名品展」を見る限り「民芸の呪縛」から放たれ、「品格」のある工芸品の生産を望むのは私だけではないであろう。

沖縄の工芸の原点と底力を見る思いがした展示会であった。立派な図録と好企画のわりには入場者が少なかったことが気がかりである。

(画廊沖縄代表)